

産技大で学ぶ。

修了生たちの
キャリアデザイン



産業技術大学院大学で学ぶこと。

それは、社会で活躍するために必要な実践力を究め、
新たなキャリアデザインをすることです。

学びを終えて社会に出て活躍する修了生に、
入学のきっかけや在学中に学んだこと、修了後の様子などを聞きました。

彼・彼女たちは何を学び、どう役立てているのか。
その声を3つのカテゴリーに分けて紹介します。

さらに高いステージを目指す人、
学びを転機に新たな道へ進む人、
想いを形にするため会社を興す人。

それぞれの経験談を通じて「産技大で学ぶ」ことの意味が
より身近に感じられるはずです。

また、ここで紹介した修了生の姿は
みなさんのロールモデルになるかもしれません。





CASE: 01

セカンドライフのキャリア開発

会社の肩書を離れた キャリアを考える

AIIT に入学したときは、外資系の大手コンピュータ会社にいて四半世紀が過ぎ、プロジェクトマネージャ (PM)としてのキャリアも積んでいました。私生活で子育てを終えた頃、具体性を持って考えるようになったのは 60 歳以降の生き方についてです。

私には若い頃から、**自分の能力で海外ボランティアに貢献したい**という夢がありました。その夢を定年後に実現するためには、**会社での肩書なしにキャリアを証明できるものが必要**であろうと考え、AIIT の門を叩きました。主な目的は、修士号を取得することと IT 業界しか見てきていない視野を社会に広げることです。

AIIT には、日本の IT の土台をつくり上げた方々が指導者として名を連ねています。その講義内容は専門的であることはもちろん、この国の IT 業界の常識であるはず。学生も、多様な分野から集まります。そうした各界でキャリアを

積んだ方々と知り合い、日本のビジネスのマジョリティに触れられることも、アメリカのルールに則った外資系企業で働いてきた私にとっては魅力に思えました。

知識を効率よく吸収できる 洗練された授業内容

受講して気づいたのは、この大学の教育が洗練されていることでした。例えば私自身が経験と知識を持つ PM についても、深い知識を短期間で効率よく吸収できる仕組みが確立されています。

PBLにも同じことがいえ、プロジェクトを進めながら専門的な知識を修得できるテーマが用意されます。私たちが取り組んだテーマは、PM 育成のためにつくられた既存のシミュレーション・ソフトを改良し、新しいモデルを考案すること。

苦勞した甲斐あってよいものが出来上がり、現在も授業で使われているはずです。

そうした結果以上に貴重な体験となったのは、**若い人と同級生としてプロジェクトに取り組めたこと**でした。会社に戻れば私にも後輩がいて、若い世代と接する機会はあります。しかし、やはり上司と部下の関係。その点、**大学では年齢が離れていても同級生ですから、対等な立場で議論し、思いも寄らぬ考え方や価値観に触れられました。**

考えてみれば年下が年上の命令に従うのは、上下関係がはっきりしている会社内だけ。海外か国内かを問わず、社会活動の多くは異世代との協働です。PBL に取り組みながら、私はその予行練習をしているような気になりました。

ところで、現在勤務する会社は入学時に在籍していた企業ではありません。修了と前後して転職したのです。大きな理由は、AIIT で学んだことを仕事に活用してみたくなったから。セカンドライフを始めるまで、もうしばらく自分の可能性を試してみたいと思います。

石井 浩靖 さん

情報アーキテクチャ専攻 2011 年修了
外資系コンピュータ会社所属
仙台電波工業高等専門学校
(現・仙台高等専門学校) 出身





頭の中に未来へのナビゲーションを持つ

経験の積み重ねが 意味をなし難い時代に

メディアの主役は、ここ30年で激変しました。私が社会に出た頃、最も輝いていたのは広告業界。優れた才能は、新聞や雑誌の広告、大型のポスター、テレビCMの制作現場でしごを削っていました。

私も渦中の一端で多くの現場を踏み、スキルを磨くことに力を注いでいました。当時は、経験の積み重ねがキャリアに反映され、力量の証明にもなったからです。

インターネットには1995年の黎明期に関わり、早くからその可能性を理解していたつもりですが、1998年に興した制作会社の仕事は、通信インフラが未整備だったこともありまだ紙メディアの仕事が主流でした。しかし、インターネットの広がりやモバイルデバイスの普及で状況は一変します。なかでも決定的な変化は、**日進月歩のテクノロジーが支える世界では、特定の技能の積み重ねが意味をなさなくなったこと**。早晚ベテランの技術は不要になります。

そうした時代に経営者として必要なことは、未来を読むことです。

**社会全体をマクロな視点
で捉え、変化に**

**いち早く備えるためのナビゲーション
を頭の中に持ちたい**と考え、AIITに学びました。

何かが得られる授業は ビデオで知識を定着

創造技術専攻を選択したのは、ここで学べる技術経営(MOT)やイノベーションの手法が応用できるのではないかと思ったからです。ここで得た知見から時代を読み解くナビゲーションを構築し、会社を刷新する計画でいた私は、得ることが多そうな授業をひとまず受講し、期待通りであればそのまま履修。その授業はビデオを繰り返し観て、内容を自分の知識として定着させるよう努めました。

次の変化に備え 自らをイノベーション

3年の長期履修で得た最大の成果は、**物事をどのように考え、世の中の在り様を頭の中でどう構築するかという方法論を手に入れたこと**です。経験の積み重ねが役に立ち難い世界では、物事を多角的に見て、臨機応変に対応する力が求められます。

新たに入手した情報とすでに持つ知識とを状況の変化に応じて常に見直し自分なりの知見を創出する。その知見をナビゲーションとし、**先を見据えた経営ができるようになりました**。

会社の事業は現在、モバイルコンテンツの制作とそのコンサルティングが中心。取引先や仕事仲間も変わりましたが、いつかはかつて紙メディアと共に制作した仲間が経験の積み重ねにより得た力を発揮できる『場』をつくり出すことが私の夢。その受け皿としても、会社を一日でも長く存続させたいと考えています。

井上 匡 さん

創造技術専攻 2015年修了
株式会社東京リテラシー代表取締役
株式会社システムシンカーズ代表取締役
横浜市立大学出身





他に類を見ないアジアネットワークに着目

世界有数のエコノミストに プレゼンテーション

学生時代から現在まで、一貫して無線通信の世界でキャリアを積んできました。AIITに入学したのは、外資系の通信会社で無線ブロードバンドシステムのエンジニアとして働いていたときです。AIITが立ち上げた「APEN（アジア高度専門職人材育成ネットワーク）」の組織と活動に着目した私は、そのネットワークを通して**新興国でのサービス開発と人脈の拡大を図りたい**と考えました。

グローバル化がいわれて以降、日本でも海外の大学と協定契約を結ぶ教育機関が増えています。数あるそれらの学校間協定と「APEN」が一線を画すのは、相手国およびわが国の政府が、国際組織としての価値を認証していること。つまり「APEN」での活動は、アジア諸国の政策にも影響を与えうる可能性を持つということです。AIITでは、そうしたグローバルなダイナミズムと身近に接するとともに、私と同じような考えを持つ人との人的ネットワークを築きたいという思いがありました。

実際、**国際金融市場での新たな融資**

モデルを開発したPBLの成果を、**ジャカルタで発表する機会を得ます**。研究発表の会場で世界有数のエコノミストと議論ができたのも、「APEN」の枠組みがあったからこそ。その時の興奮は、いまも鮮明に覚えています。

インベンションと イノベーション

無線通信の開発現場に長年いた私は、新たなスキルの修得は求めていませんでした。しかし、大学院から社会に出て約15年が過ぎたところで学んだAIITでは、それまでがむしゃらに突き進んで蓄積した知識や技術を系統立てて整理することができました。

また、30代に疑問を持って以来、誰に尋ねてもなかなか明快な答えが得られなかった**インベンションとイノベーションの違い**についても、**私なりの解釈を確立することができました**。その結果、仕事への取り組みも変わりました。

エンジニアである私はそれまで、既存にないものを創出するインベンションに多くの価値を見出していました。しかし、「**インベンションとイノベーションとの違いは?**」という禅問答のような問いに対してもAIITの教授陣は明快な言葉をもって学生の視野を広げてくれます。以降、自身の**ここだけは譲れないというコアスキルを客観視できるようになった**ため、イノベーションを起こすために活用する技術の優先順位も明確になり、他社との協業もスムーズになりました。

いまは自分のコアスキルの活用先として、常にグローバルな視点と産業を問わない広がりを実感しています。

江川 潔 さん

創造技術専攻 2013年修了
株式会社共和電業所属
東海大学大学院出身





修了後に再発見した PBL の価値

システムの規模が拡大し 求められる広範な IT 知識

仕事を通して身につけた IT の知識を整理し、体系的に定着させよう。そう考えるようになったのは、社会に出て 10 年が過ぎた頃でした。そのまでに ERP やウェブシステムの導入に携わり、PM の経験も積みました。ただ、キャリアを重ねるにつれ任されるシステムの規模が大きくなり、それまで以上に **IT の世界を俯瞰する視野と広範な知識を修得する新たな学びの機会が必要と感じていました。**

また、主要なプロジェクトを終える
と仕事環境を一新したくなり、転職を
重ねること 4 社。ひとまず腰を落ち着
けるにあたり、大学院へ通えば修了ま
では辞めないだろうという目論見もあ
りました。こうした目的を、**できるだけ
経済的負担を軽くして達成するため、
公立である AIIT を学びの場として選
びました。**

多忙でも学び続けるため 通学の日々を記録したブログ

仕事をしながらの通学は、想像し
ていた以上に激務でした。というのも、
入学と前後して出張が急増。1 ヶ月の
出張日数が 20 日に達した時期もあり

ました。それでも 2 年間で修了できた
のは、社会人が学ぶための制度を整え
た AIIT のサポートがあったからこそ。
私自身も出席できる日は、たとえ 30
分の受講であってもキャンパスに足を
運びました。

入学と同時にブログを開設したことも、
学びの継続に有効でした。社会
人学生としての自覚を促すという私的
な目的で始めたブログでしたが、働き
ながら学ぶことに迷っている人からの
相談が寄せられるようになり、**後日私
の書き込みを読み入学したという後輩
とも出会いました。**

他社の業務改善に取り組む PBL 経験の希少性と有効性

**苦勞しながらも、学び続けた甲斐
は十分にありました。**在学中に 2 度の
学会発表も経験。そのうち 1 回は
PBL の成果です。

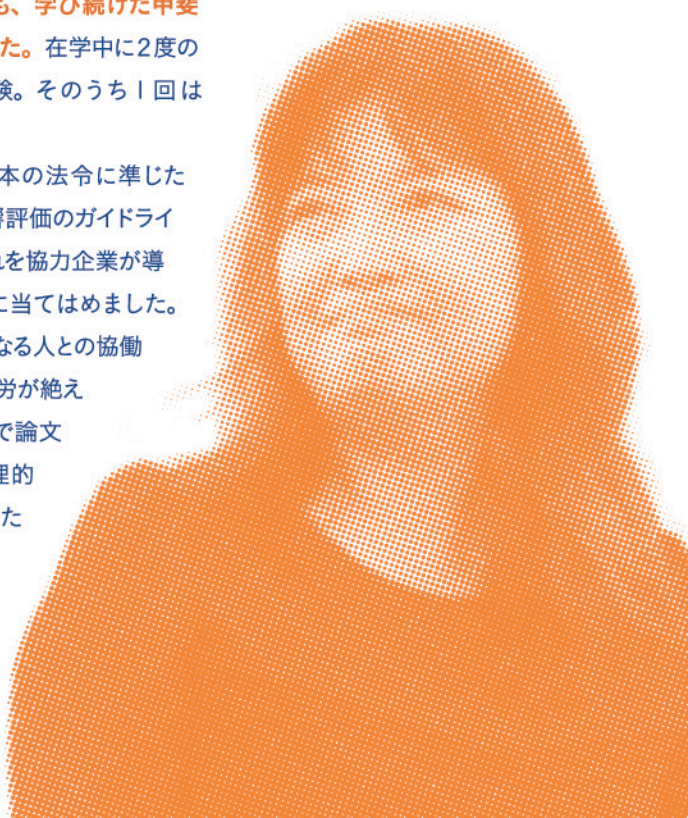
PBL では、日本の法令に準じた
プライバシー影響評価のガイドライ
ンを作成し、これを協力企業が導
入するシステムに当てはめました。
世代や背景が異なる人との協働
プロジェクトは苦勞が絶え
ず、一時は一人で論文
にしたほうが合理的
ではないかと思った

ほど。しかしその経験の価値は、修
了後に高まります。特に企業側の人
間として後輩の PBL に協力し、少し
離れた立場でこの学修に関わった際、
価値観をぶつけ合いながら他社の業
務改善に真正面から取り組む経験の
希少性と有効性を実感しました。

入学時に在籍した会社にはこれま
で最長の 8 年務めました。異動に
より IT 部門から離れたこともあり、
新たなシステム開発の現場を求め転
職。そして現在は E コマース推進の
リーダーとして、自社ブランドを日常
のカルチャーレベルで広める戦略を立
案・実行しています。システム開発か
らこれを活用する立場に移っても、
**AIIT で構築した IT の盤石な基盤が
私の仕事を支えています。**

大類 優子 さん

情報アーキテクチャ専攻 2010 年修了
アシックスジャパン株式会社所属
大阪大学大学院出身





CASE: 05

門外漢だった IT の感性を養う

企業で動く IT の現状を 教員や社会人学生から学ぶ

大学ではプラスチックの物性を研究し、修士号を取得しました。IT のセキュリティ会社に就職したものの、入社までにコンピュータやインターネットを深く学んだことはありませんでした。新入社員向けの研修はありませんが、**自分なりに仕事の基盤をつくらうと考え、働きながら学べる AIIT への入学を決めました。**

企業がどのようなシステムを組んで IT を動かしているかなどの実態を、実務経験のある教授陣や学生である現役の職業人から教えてもらえることも期待しました。実際、外部の人間が知る機会の少ない企業内のサーバーについて知ることができました。

研修と授業の相乗効果で IT への理解を深める

入社後しばらくは、会社で研修を受けながらの通学となりました。その間は目が回るほどの忙しさでしたが、それを乗り越えたことで多忙への耐性が強化されたように思います。

会社と大学とで並行して学ぶことの相乗効果もありました。研修で教えられるのは、仕事に即使える内容。その基礎部分を大学の授業が補ってく

れ、学術的な基盤と実践的技法をつなげながら理解を深めていくことができました。また、研修ではほとんど触れられず AIIT で触れる機会の多かった仮想マシンは、後から仕事で頻繁に利用することとなります。現在これを柔軟に扱えるのは、AIIT で基本的な理解を済ませていたからといえます。

仕事を常に先取りした AIIT の授業

AIITでの2年間を振り返り、**最も思い出深く記憶に残っているのは、出目の異なる6人でプロジェクトを完結させた PBL です。**私たちが取り組んだテーマは、映像におけるプライバシー侵害の自動判定。プライバシーを侵す映像とは、という定義づけを議論することから始め、動画の解析技術を用いて画像を判定する概念実証 (POC) を開発します。開発の間には、学外で発表する機会を持ち、専門家と意見交換を行いました。

このプロジェクトで扱った機械学習の技術も、その後の仕事で生かされ

ます。仮想マシンもそうであったように、**AIIT の学びは常に私の仕事を先取りしてきたこと**になります。また、一つのプロジェクトを完遂させた経験により、仕事において次の展開を推量できる目が養われました。先を見通せるようになったことで、突発的に起こる問題の所在を的確に判断し対処できるようになり、仕事への自信をもたらしてくれました。AIITの授業が入学時は門外漢だった IT に対する感性を育ててくれたおかげで、確かな背景を持って日々の仕事に打ち込んでいます。

尾崎 敏司 さん

情報アーキテクチャ専攻 2015 年修了
トレンドマイクロ株式会社所属
京都大学大学院修了





性格が変わるほどの刺激

東京の大学であれば 就職活動にも便利

静岡大学で電気電子工学を学び、AIITに入学しました。同級生の多くは静大の大学院に進みますが、私は**専門分野の研究を続けるより、専門職大学院で実践的に学ぶことに魅力を感じました。**

社会人をはじめ全国から集まる多様な人と机を並べる経験から、学べることもあるでしょう。また、地元での就職を希望していましたが、東京であれば地方の企業の説明会や採用もあり、就職活動も可能と考えました。

いま自宅から通勤しており、その選択は正しかったと確信しています。それは、地元での就職がなかったからではなく、入学当初に想像していた以上のことを2年間で学べたから。特にPBL ほか多くのグループワークを経験し性格も前向きに変わり、自主的に物事に取り組むようになったことを自覚しています。

スピード感ある 周囲のリアクション

学部までの私は、人の後に付いていくタイプ。そのような性格でも、上下関係がはっきりしている大学の研究室での卒業研究には支障を感じませんでした。

しかしPBLでは、チーム全員が分担した役割に自主的に臨まないとプロジェクトが進みません。社会人の同期生にその点を指摘された私は、それまでを省み取り組む姿勢を改めました。プロジェクトの進め方やそのテーマが持つ魅力の伝え方などにおいて「**ああんりたい**」と思える**社会人学生を真似ることから、自分を前向きな性格へと変えていきました。**

主体的にプロジェクトに関わり自分から発言するようになると、即リアクションが返ってくる。学部では経験のないスピード感に追いつくため、私の対応力も自然と増します。PBLという授業自体が発信力を高め、プロジェクトの中盤以降は、試作のための協力企業との交渉やプロジェクト成果の対外的発表は私が担当するまでになりました。

学んだことを融合し 新事業に役立てたい

ちなみに、PBL で取り組んだプロジェクトは、「偏光を用いた多角的撮像システムの開発と応用」。このテーマは、私が学んだ電気電子工学と就職先の企業との橋渡しをすることになります。

私が就職した会社は、自動車用ミラーの生産では国内最大シェアを誇ります。しかし、今後ミラーがカメラシステムに取って代わることは必至。その開発では、電気電子工学と光や可視化に関する技術が求められます。PBLでは、社会人学生からソフトウェア開発も学びました。それ

らを融合した能力を
発揮し、会社の
新事業に深
く関わりた
いと考
えています。

金田 桂一さん

創造技術専攻 2016年修了
株式会社村上開明堂所属
静岡大学出身





CASE: 07

ソフトとハードを統合できる強み

情報へのアクセス方法が変わりつつある

大学を卒業してから、ソフトウェアエンジニアとしてキャリアを重ね、開発プロジェクトを任される立場にもなりました。ソフトウェア開発には自信がありましたが、研究部門への異動が決まり職場環境が一変します。大学で修士・博士課程を修めた研究職員に囲まれ、私も学位の必要性を実感。AIITへの入学を決意します。

創造技術専攻に進んだのは、それまで学んだことのないデザインやハードウェアについての知識を修得するためです。

ちょうどIoTやVR・ARなどの新しい技術が注目され始め、人の情報へのアクセス方法が変わりつつありました。私は、高齢者や障がい者がストレスなく情報にアクセスできる技術開発に取り組むなかで、ソフトとハードをそれぞれ別々に開発することの限界を感じていました。そこで、操作を容易にするデザインや使い

やすいハードウェアについてAIITで学び、それらの知見をソフトウェアのスキルと融合させて新たな領域を開き、研究員としての強みにしようと考えたのです。

増えた引き出しの数だけ思考を自由にする

3年間の長期履修で修得した知識は、ITに対する世界観を大きく広げてくれました。例えばハードウェアについては、メカニズムに行きがちな私の視線を、形が持つ訴求力に向かわせます。授業では、最適な形を得るまでのプロセスにも言及。設計図どおり正しく書

けば正しく動くことを当然とするソフトウェア開発をものづくりの基準としていた私も、ハードウェア技術者である同期生が語る「遊びが必要」と

いう言葉の意味と、**図面にとらわれないものづくりを理解できるようになりました。**

デザインで色や造型を決める背景や根拠も知り、かつてのソフトウェア開発でユーザーデザインエンジニアが決めた画面表示に対する疑問も解けました。

修得した知識の集大成として、2年次のPBLでは脳波に感応してシャッターを切るデジタルカメラを開発。私はそれを改良し、ドライブレコーダーとして自家用車に搭載しています。

仕事では、手による操作を必要とせず、顔の動きに応じて遠隔地のロボットが動くテレプレゼンスロボットを開発。そこではテレビ会議サービスの作成から、カメラをつけたロボットの製造までを一人で完結させました。特許を取得したこの技術は、へき地や遠隔地で暮らすお年寄りの医療や保健に使われることを想定し、大学との共同研究を進めています。

ソフトウェアのほか、ハードウェアやデザインにも通じた強みは、研究者としての引き出しを増やし、自由な思考を私にもたらせてくれました。

小杉 晋央 さん

創造技術専攻 2015年修了
日本IBM株式会社所属
東京理科大学出身





“なりたい自分”へ導く羅針盤

目標は明確に思い描けても そこへの道筋が分からない

世の中に何かを残す仕事がしたい。10代で抱いた漠然とした思いが自動車に絞られたのは、高校卒業後に入学した工科大でのこと。私は経営工学系の学科にいたのですが、3次元 CAD で自動車をデザインする他学科の演習を目にし、自分がやりたいことが具体化されました。

とはいえ、デザインは未経験。そこで大学を辞めて専門学校に入り、スケッチなどの基本テクニックを学びました。しかし手先の技だけを高めても、不満や不安が残ります。クリエイションの現場でプロとしてデザインする“なりたい自分”は想像できても、そこに至る道筋を描けない。根本的な何かが必要だと思い入学した AIIT では、**デザインに対する考え方を深化させ、技術と頭の中を結びつける**ことを学ぶ目的としました。

カッコよさの追求に 新たな視点が加わる

AIIT の授業は1年次からグループワークが中心。世代や背景が異なる人との共同作業は新鮮でした。互いの

得手不得手を認め合い、役割を分担して一つの目的を達成します。2年次のPBLもその延長にあり、私のチームは、東京五輪で活躍する小型モビリティを考えました。

こうした授業と並行して、プロのデザイナーになるために「足りない何か」を探しました。AIITでは、自動車開発で多大な功績を残した方々が教鞭を執っています。そうした業界の重鎮に毎週作品を提出し、厳しく評してもらうことを自分に課しました。そしてこれを繰り返すなかで、**カッコいいスタイルだけを追っていた自分の中に、車に乗る人の生活や喜怒哀楽などを想像する視点が加えられました**。それは、デザインと社会

が繋がっていく思いでした。

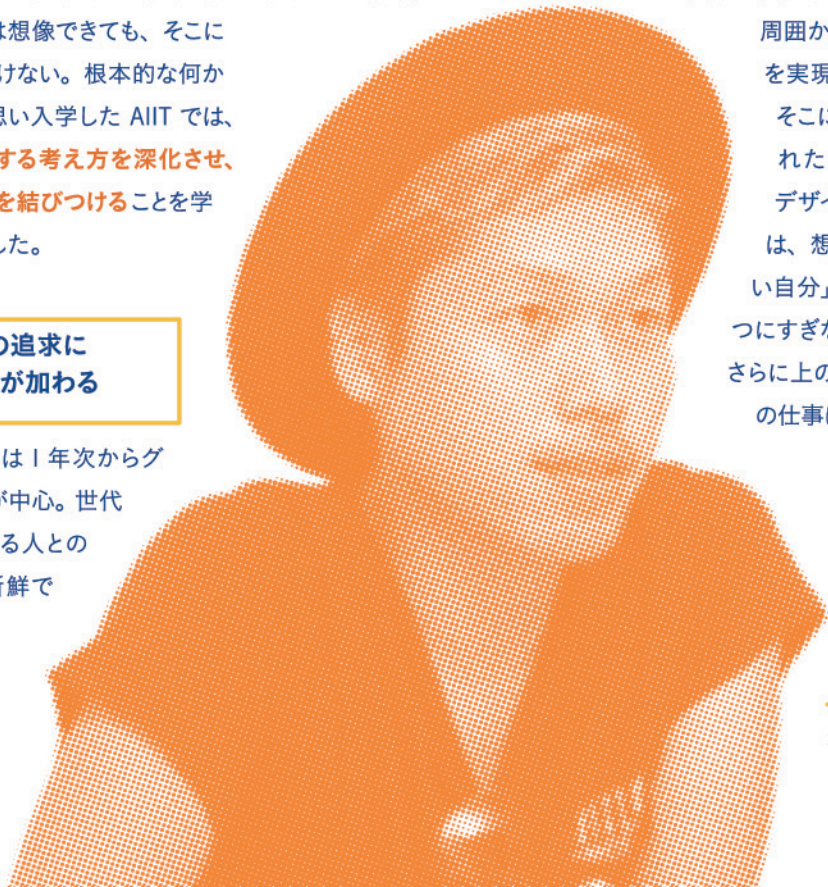
コミュニケーション能力に 自動車会社が好評価

私はいま、自動車会社のデザインルームを職場としています。正直、就職活動でライバルとなった美大出身者と比べ、スケッチなどの技術は劣っていたと思います。しかし**会社が評価してくれたのは、私のコミュニケーション能力でした。それらは AIIT のグループワークで養われたもの**。会社のアイデンティティとなるデザイン戦略を練る組織横断のチームに参加しているのも、異分野の人と協働できる強みを買われてのことでしょう。

周囲から無理と言われた夢を実現できたのは、AIIT がそこに至る道筋を示してくれたから。ただ、プロのデザイナーになって思うのは、想像していた「なりたい自分」の姿は、過程の一つにすぎなかったこと。いまは、さらに上の自分を目指し、日々の仕事に打ち込んでいます。

嶋崎 佑介 さん

創造技術専攻 2015年修了
日産自動車株式会社所属
HAL 東京出身





起業後自ら学び、社員教育の礎に

プログラミングについて 古い知識を更新する

会社を立ち上げるまではシステムエンジニアとして、主に製造業の情報システムを開発していました。当時のシステム開発で使われていたのは Prolog という、いまではあまり聞かなくなった言語。大学や研究機関などでは現在も扱われているかもしれませんが、私が知る限り、企業のシステム開発には使われてはいません。

起業後、システム開発で多く使われる C 言語や JAVA を理解しなければ、社員教育がおぼつかないと考え、流行りのプログラミング言語を含め、情報システムに関する新しい知識を得るため

AIIT に

入学しました。「営業」と称して飲み歩く時間を勉強に充てたほうが、健康や仕事のためになり、お金の有効活用にもなるだろうという思いもありました。また、仕事をしていくなかで接することのない同業者と知り合える期待もありました。

利害関係のない同業者との 修了後も続く交流

AIIT で2年学んだ成果は、入学時の思いを上回りました。私のプログラミング技能は、就職してから身につけたもの。原理などの根本から積み上げてはいません。しかし授業で開発の主流となった言語を学びながら、プログラムの構造まで理解を深めることができ、仕事で扱うプログラムと理論が初めてジョイントされました。また、システム開発をマネジメントする仕組みも理解できたことで開発業務を見渡せるようになり、経営という点でも開けた視野を獲得しました。

そして何よりの財産となったのは、利害関係のない同業者の人脈を得たこと。修了後も交流が続く彼らは、広い意味で IT

に関わる同業者ですが、専門とする分野や立場が異なります。そうした人たちとつながりがあることで、私が知らないことに精通した人に手軽に教えることができます。これは、**会社を経営する者にとって大変心強いことです。**

会社をあげて AIIT 入学を奨励

会社の社員は全員、中国の大学から新卒で採用した者ばかり。その新人研修は、テキストも手法も私が AIIT で学んだものを活用しています。また、学ぶ意欲のある社員には AIIT への入学を奨励し、会社の方針として、例えば事前の申告があれば早めの退社も早退扱いにしないなど、学ぶための時間を可能な限りつくってあげられるよう配慮しています。それは、AIIT で学ぶことが有意義であることを、私自身が経験したからに他なりません。

面倒見のいい先生は、いまも時々当社に足を運びアドバイスをくれ、私も時間を見つけては AIIT を訪ねます。 AIIT は私の会社になくはならない存在です。

周 剛 さん

情報アーキテクチャ専攻 2010 年修了
株式会社アイ・エス・ブレン 代表取締役
中央大学卒業



国際プロジェクトを先導する力を修得

専門分野を強化する 33年ぶりの学生生活

NTT 在職時代に1998年の長野五輪で通信システムの管理・運用に関わったことを機に、海外事業が仕事の中心になりました。現在は通信・放送分野の国際開発コンサル法人に出向し、途上国で情報通信や放送インフラの構築に向けたコンサルティングに当たっています。相手国の政府と共に、現地での調査結果に基づき日本のODAとしてプロジェクト化し、これを完成させるまで関わります。

AIIT 入学は53歳のとき。高専を出て20歳で就職して以来、33年ぶりの通学となりました。 目的はICT分野における専門知識の強化、プロジェクトをマネジメントする能力の体系化と新たな知見の修得、そして修士号の取得です。

海外で求められる能力を体系的に身につける

私はICTの専門家として途上国に派遣され、現地ではその知見が求められます。ICTのうちC、つまりコミュニケーションについては仕事で多くの実績を積んだ自負がありました。それに

比べ、虫食い状態だったITの知識の穴を埋め、最先端の知識を加えて知見の体系化を目指しました。

プロジェクトマネジメントについては、経験による自己流を見直し、汎用性の高い手法を身につけようと考えていました。

AIITにはPM(プロジェクトマネージャ)育成のための教育が充実しています。PMBOKという知識体系があることは知っていましたが、細部まで決められたマニュアル本的であり、すべてをマスターしなければいけないと思い込み、手をつけずにいたのです。しかし**AIITの授業は、自分に必要なこととそうでないことを解きほぐしてくれ、PMBOKを参考書として扱えるように**

なりました。さらに有意義だったことは、学校では学べないと思っていた人間性について一定の基準を獲得したこと。AIITの授業

はPMに求められる人格を形成する要素を細分化することで、自分が充たしていることと足りないことを気づかせてくれる工夫が施されていました。

そして修士号の取得は、海外で仕事をしていくなかでその有無が重視されることを知ったため。今後、私が発案したプロジェクトを実行するためには、必要な学位と考えたのです。

自分の力を客観視し 次の挑戦の足場とする

もとより2年間ですべてを学び、身につけようとは考えていません。しかし、AIITで学び、強みと弱みを客観的基準で判断したうえで、自分のポジションが自覚できました。その結果、取り組む仕事の全体をグリップでき、わかまえることを覚えた半面、**強みを生かせる仕事にはさらに自信を持って臨むようになり、次のことに挑戦する確かな足場ができた**と思います。

田村 正人 さん

情報アーキテクチャ専攻 2016年修了
東日本電信電話株式会社所属
(一般財団法人 海外通信・
放送コンサルティング協力に出向)
長野工業高等専門学校出身





夢実現のために必要だった2年間

大学、専門学校を経て AIITに入学

自動車をつくる仕事に就きたいという就職観が、運転免許を取りにわかには芽ばえました。経済学部において工学系に疎かった私は大学卒業後、自動車設計の専門学校に入り、構造に関する知識や工作機械の使い方、3次元CADの操作法などを身につけます。しかし、製造・設計技術の習得では飽き足らず、ものづくりの理論を求めようになり、専門学校を中退してAIITの門を叩きました。ここで学べば、経済学部で修得した企業戦略論や産業組織論に関する知見と、専門学校で身につけた製造・設計技術を核にして、**自動車開発を目指す視野の拡大を期待できた**からです。

いまでも仕事で用いる 授業で学んだ手法

1年次は、開発や設計に関わる技術、組み込み系システム、デザインなどを幅広く学びました。どの授業でも**実践に即した理論に触れることができ、専門学校で身につけた製造スキルに確かな背景が備わっていく**ようでした。

いまでも鮮明に授業内容を覚えているのは「技

術経営特論」と「信頼性工学」の2科目です。「技術経営特論」では、ものづくりにおける基本設計構想の分類を実例と共に学べ、自分の目指す分野におけるものづくりの特徴を理解したうえで、今後向かうべき方向性を明確化できました。また「信頼性工学」では、身近な家電製品を例にして製品開発に伴うトラブルを未然に回避し、製品の信頼性を確保する手法を学びました。その手法は、いま自動車のシステムを設計する際に用いており、テクノロジーの追求と機能の高度化だけに陥りがちな**エンジニアとしての私の視線をユーザーや市場に向けさせる気づき**を与えてくれています。

1年次に学んだ理論を 2年次のPBLで実践

こうして1年次に製品開発の理論全般を学んだうえで、2年次は理論の実践として、既存にない技術をチームで開発しました。与えられたテーマは、圧力センサーの用途拡大。私たちはセンサーを敷きつめたシートにより、これを踏んだときの足裏の圧力を測定し個人を判別する認証技術を構築しました。

AIITを修了した私は、ブレーキシステムの開発会社に就職します。リーマンショック後の就職難のとき、学部卒業後3年を経ていたことを強みとして就職活動に臨めたのは、AIITのサポートがあつてのこと。そして現在は海外市場向けに電気自動車を開発・製造する会社に勤めています。工房のような少数精鋭の会社ですが、**自社で一台の車をつくり上げる仕事にやり甲斐を感じています。**

中谷 純さん

創造技術専攻 2010年修了
海外市場向け電気自動車メーカー所属
慶應義塾大学出身





学びを学ぶ面白味

道理が通らない仕事の経験を筋を通す学問で検証

AIIT に入学したのは、社会に出て 20 年を経た頃です。金融業務の IT 化と軌を一にした私のキャリアは、プログラマーや SE の経験よりもシステムのプランニングや開発プロジェクトの管理、そしてシステム監査や情報セキュリティなど、そのほとんどが管理する側での経験を重ねてきたものです。**この経験や知識を、アカデミックな環境(学問の視点)で客観視してみたいと考えました。**

ここで言う客観視とは、身につけた知識の整理・体系化を求めたものではありません。ほとんどの仕事は、道理だけでは済まされず、いろいろなコトやモノに配慮することが不可欠でした。そうした経験を積み重ねてきた自分が、理に重きを置く学問の場でどうなのか見てみたかったのです。

先生方の指導姿勢に触れ変革した仕事へのスタンス

もちろん、様々なカリキュラムを通して新しい知見を得ましたし、PBL も貴重な体験となりました。しかし、**私にとって重要だったのは、それらを指導**

する先生方の振る舞いに接したことでした。

私が学んだ先生には、教科書等の字面だけを追いかけて教える方は見当たらず、常に自作のプリントだけを用いる先生もいれば、教科書の内容について自身の経験に基づく考えを加えたり、あるいはそれらをミックスさせたりしていました。翻って仕事を考えると、社内や業界のルールとされるものに沿うことを、常識ある社会人のわかまえとし、発想や思考をどこかで制限してきた自分に気づきました。

しかし、大きな方向性や本質の見極めを誤っていなければ、敢えて独自性や意外性をもつ考えを加えることで、新たな展開を迎えることもあります。あらかじめ引かれている、と思いついていた思考の境界線をはみ出してみても、先生方の指導姿勢を通して学べたと思います。

また、迷ったら原点に戻るという学問ならではのアプローチもあらゆる場面で活かせるようになり、仕事上のトラブルを事前に回避するための過剰な先読みもなくなりました。

仕事上のトラブルも学びの一つ

AIIT で私が得たのは、学びのプロセス。振り返れば仕事はもちろん、大学までの学校生活でも、進学や卒業、就職のためというゴール指向(目的・結果主義)で学んできました。AIIT で初めて、学ぶことそれ自体、言い換えれば新たな何かを知り身につけていく過程の満足感を味わいました。

以来、仕事でのトラブルも、人生を豊かにする学びとして捉えるように心がけ、学びになっていなければ、どうすれば学びとして楽しめるかを考えるようにしています。

AIIT で学んだ最も有意義な成果は、**学ぶこと自体の面白さを体感したこと。**その経験は、仕事の取り組みや発想をより自由にしてくれました。

長嶺 勸さん

情報アーキテクチャ専攻 2008 年修了
米保険系金融グループ IT サービス会社所属
武蔵工業大学(現・東京都市大学)出身





ものづくりを俯瞰する客観的視点を獲得

経験的に得た知識の 体系化を図る

AIIT で学んだ成果は、大きく2点あります。一つは、ものづくりのプロセスを学術的に学べたこと。もう一点は、設計に対する多様な視点と、設計を客観的に評価する手法を獲得したことです。

大学で生物工学を専攻していた私は、電気製品やデジタル機器の設計や製造について学ぶ機会がありませんでした。プログラミングの経験も、研究用に特化したものだけ。携帯電話に組み込むソフトウェアの開発とは勝手が違います。

ですから、開発のための知識や技術は、すべて働きながらその時々に必要な部分だけを身につけたもの。仕事に直結しているという点では実践的といえますが、体系的な知識ではなく、商品開発を俯瞰することができずにいました。そのため無駄も多く、不可欠な試行錯誤かどうかを判断する根拠も待ち合わせていませんでした。

ものづくりをもっと洗練させ、合理的に進めるため、経験的に身につけたことを体系化したい。そう考え、仕事をこなしながら学べる場を探していました。

新規事業の企画提案に AIIT の仲間と応募

AIIT で2年間学び、入学当初の目的は達成できたと思います。ものづくり——仕事においては商品開発のプロセスを論理的に理解したことで、仕様決定から要件整理、設計を経て、実装に至るまでのフェーズごとに重要ポイントを逃さず注力できるようになりました。

また、設計については信頼性や品質を保証する手法、他の製品との類似性を検証する手法などを身につけたことで、仕事においても客観的視点を持って

商品の独自性を追求できるようになりました。

さらに、ものづくりを俯瞰できるようになった結果、ビジネスやプロダクトの企画にまで興味が広がり、社内の新規事業創出プログラムにアイデアを応募するまでになりました。それは、**暗中模索の状態でした。入学前の私では、考えられないこと**です。

最終選考まで残った企画には、AIIT で共に学んだ仲間も社外メンバーとして参画してもらうなど、同期生とは公私を問わない交流がいまも続いています。分野は違いますが、ものづくりに真摯に取り組む仲間と出会ったことも、AIIT で手に入れた私の財産となりました。

人だけではありません。**実は修了後も私は、品川のキャンパスに頻りに足を運んでいます。**それは、AIIT の図書館が持つ技術系書籍の充実したライブラリーを利用するため。つまり私にとって **AIIT は、入学時の目的を達成しただけにとどまらず、生涯学ぶ場になった**ということです。

平尾 康幸 さん

創造技術専攻 2012年修了
ソニーモバイルコミュニケーションズ株式会社所属
大阪大学大学院修了





情報技術を幅広くリフレッシュ

意志を継続させるため 通学して学ぶ、を選択

AIIT への入学は48歳のとき。システム開発の実動チームである子会社に出向したことがきっかけです。「抜本改革」と称し、基盤からつくり変えるタイミング。新たに開発するシステムには、最新技術の導入が求められます。しかし、本社のIT企画部門に10年いて社内調整を主な仕事とした間に、情報技術のトレンドワードは一変していました。開発を管理する立場の私が、**当時の最先端に追いつけていないことを自覚。ITの知識をリフレッシュするための学び直しの必要性を、ひしひしと感じるようになりました。**

メーカーなどが開く研修を受講してみましたが、分野が特定されITの最新状況を見渡すことができません。また、通信制の大学院も考えましたが、帰宅後も緊張感を保ちながら机に向かうより、**通学して授業時間に集中したほうが学ぶ効果が高いと判断し、AIITへの入学を決めました。**

基礎を身につければ 知識は雪だるま式に増やせる

入学の目的であるIT知識を刷新させることは、1年次の講義でおおかた

達成できたと思います。すべての最新技術について使いこなせるようになることは、そもそも望んでいません。私が求めていたのは、トレンドとされるキーワードの意味を知りIT全体での位置づけを理解して、開発の方向性を示せるようになること。基本的なことを身につけておけば、日々の実務の中で補強され、知識量は雪だるま式に増えていきます。その核となったのが、AIITの授業でした。

深く学べるから 仕事で活用できる

入学時には想定していなかった学修成果としては、**プロジェクトマネジメント (PM) を体系的に理解できた**

ことがあげられます。プロジェクト管理は役職上、すでに実践していました。しかし、それは社内のルールに従った業務であり、形式的に実行できても本質を理解してはいなかったことをAIITで知りました。ここではPMにテーマを絞った90分の講義を15コマ、それを年4回受けることができます。企業人向けの社外セミナーと比べても時間のかけ方が大きく異なり、**おそらくPMについてAIITほど深く学べる機会はほかにはないのではと思っています。**

会社の業務にEVMというPMの手法を導入できたのも、AIITで学び実用的に使いこなせるまで有効性を十分に理解できたことと、PBLを通して実践的な練習を積めたことにほかなりません。取締役就任してから、IT系企業の経営者が講義してくれた1年次の「CIO特論」の内容が反芻されるなど、AIITでの学びや経験は仕事上、多方面で有用な財産となりました。

淵澤 和行 さん

情報アーキテクチャ専攻 2011年修了
東京海上日動システムズ株式会社 取締役
早稲田大学出身





CASE: 15

異分野を取り込むデザインの新領域

エンジニアリングと デザインとの融合を学ぶ

形あるものをつくる仕事に就きたい、と考えて進学したのが工学部でした。プロダクトデザイナーという職業があることを知ったのは、卒業後は就職か大学院進学かを真剣に考え始めた頃。職業観が具体化すると、専攻している学問と将来就きたい仕事との差異に気づきました。このまま専門性を高めるより、ものづくりを広く捉える視野を養おう。AIIT に進学したのは、そうした思いからです。それは、**自分の軸足をエンジニアリングからデザインに移す**ことでもありました。

とはいえ、美大の大学院を目指さなかったのは、エンジニアとしての側面を残しておきたかったから。創造技術専攻が謳う「**エンジニアリングとデザインを融合したものづくり**」こそが、**私が取り組みたい仕事だったのです。**

ものづくりの最先端を 先取りして学ぶ

入学して実感したのは、**エンジニアリングとデザインとの思考プロセスの違い**でした。実現可能な技術を積み上げて結論を導くエンジニアリングに

対し、デザインは過程を一端置いてゴールをまず提示します。例えば、とにかくアイデアを100個出すというような、エンジニアリングが否定する偶然性も利用し、後から実現可能なアプローチを探る。多様なアイデアを集束して結論に達しかけると、また解きほぐしてみることも。そうしたデザインシンキングやHCD(人間中心デザイン)など、当時はまだものづくりの最先端でしか聞かれなかったキーワードを先行して学べたことは、就職して以降、私の強みとなりました。

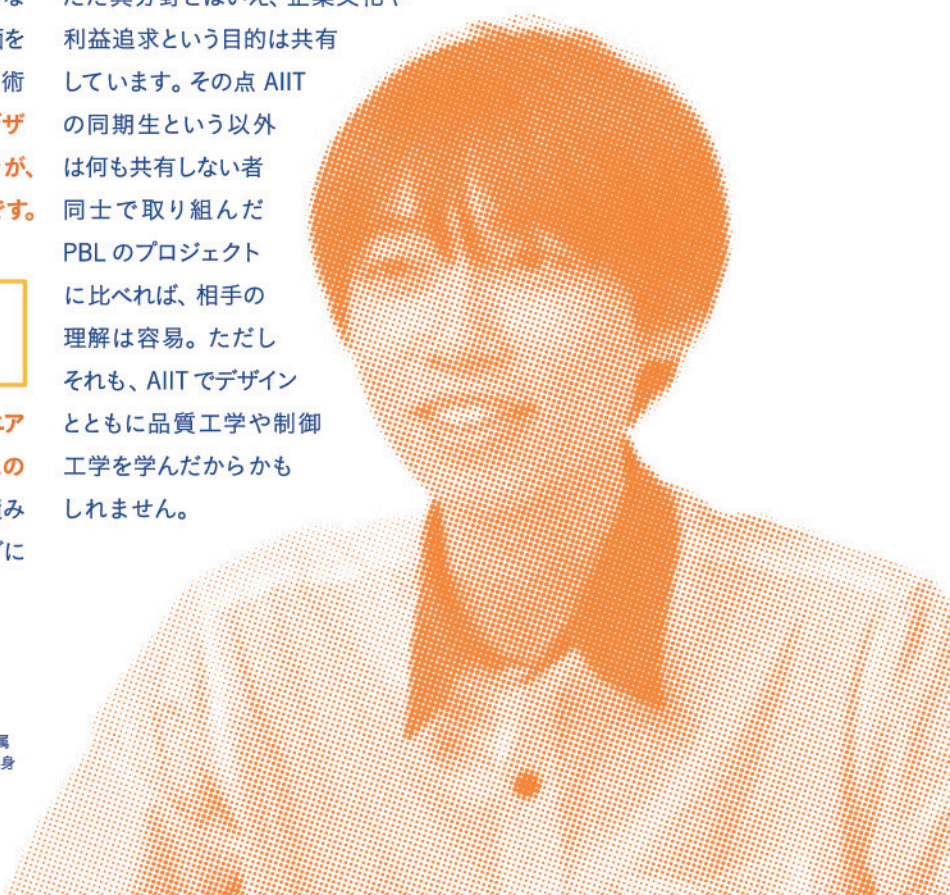
また、板橋区と連携したPBLも貴重な経験です。プロダクトデザイナーは、異分野との協働も少なくありません。ただ異分野とはいえ、企業文化や利益追求という目的は共有しています。その点AIITの同期生という以外は何も共有しない者同士で取り組んだPBLのプロジェクトに比べれば、相手の理解は容易。ただしそれも、AIITでデザインとともに品質工学や制御工学を学んだからかもしれません。

デザイナーとして 企画から関わる

AIIT 修了後はパソコンの周辺機器メーカーに就職し、ストレージ製品やアプリのUIデザインを担当。AIITで企画から関わる面白さも知っていたため、デザイナーとして新規事業にも関わりました。その後、電機メーカーに転職し、現在は公共製品のデザインを担当しています。デザインの価値をより広く社会に問う仕事の中で、**エンジニアリングをはじめ異分野を取り込んだデザインという新しい領域での挑戦を続けたい**と考えています。

古畑 直紀さん

創造技術専攻 2010年修了
三菱電機株式会社 デザイン研究所所属
東京都立大学(現・首都大学東京)出身





AIIT は新たな人脈形成の場

仕事と学業の両立に 配慮された制度

AIIT への入学は、IT について体系的に学び直すことが目的でした。

社内外のプロジェクトマネジメントや IT サービスマネジメントの講義を担当するようになり、それまでの経験や知識を棚卸しし、**最新の IT について柔軟に人材育成へ活用できる引き出しを整えたい**と考えたのです。

仕事をしながら大学院に通うという選択肢を知りましたが、当初は多忙な業務をこなしつつ通学することが困難に思えました。そのため AIIT の科目等履修生として1科目のみを受講していたところ、仕事と学業を両立させている社会人が数多く学んでいることを知り、私も情報アーキテクチャ専攻への入学を決意しました。

入学後、AIIT が整えている **社会人学生に配慮した制度の有効性を実感**しました。例えば講義はすべてビデオ撮影されるため、欠席した回を自宅で視聴することや復習に使うことができます。アーカイブ化された動画は、修了後の再勉強にも活用できます。

私は何より助かったのは、4クォーター制であることでした。科目の履修届は3ヵ月ごとですから、私はまず3ヵ月先までの仕事のスケジュールを立て、履修可能な講義を選択しました。しかも3回受講した後で正式登録すればよいので、授業内容と日程を吟味して、学ぶ目的にマッチした科目だけを正式に履修登録し、時間を効率的に活用できました。

入学時には予想しなかった 視野の広がりを実感

AIIT での2年間の学びは、当初の目的を達成して余りある内容でした。

入学時に目指した専門分野の体系化はもちろん、学術的な視点で IT の最新知識を吸収することもできました。

また、**グローバルな視野の広がり**は、**入学時には予想していなかった成果**です。AIIT は、他専攻の科目履修が可能。私のグローバル感覚も、創造技術専攻の授業内容を基盤としています。異文化を背景とする人とのコミュニケーションについて考えることを通し、私の興味は政治や経済、歴史にまで広がっていきました。

修了後も AIIT の多くの仲間と多くの時間を過ごし、IT だけではなく、日本におけるイノベーションのあり方について考えるときを有意義に感じています。それは AIIT の科目履修を始めた日から続いています。

私自身が躊躇したように、仕事をしながら大学に通うことは高いハードルだと思うかもしれませんが、しかし「**学びたい**」という思いは、**新しい世界への扉を開くこと**。そのチャンスを逃さずに活かし、自身の成長につなげてください。

三宅 由美子 さん

情報アーキテクチャ専攻 2014年修了
総合電機メーカー IT系関連企業所属
公立大学理系学部卒業





CASE: 17

デザインの発信力を高める

修了生のユニットで 海外のデザインコンペに入賞

2013年と14年、私もメンバーの一人である Team INNOS (イノス) による作品が、海外のデザインコンペティションで最優秀賞、優秀賞と2年連続の上位入賞を果たしました。

Team INNOS は、AIITの修了生により結成されたデザインユニット。授業を通して志を共感し合った4名が、仕事とは別のところでコトづくり・モノづくりの場を持つと集まった異業種集団です。修了後も続いた交流のな

かで、**在学中に創案したアイデアを作品化して応募したところ、大きな賞をいただきました。**現在まで8名に拡大したメンバーは、それぞれ本業の状況に応じて関わり方を融通しながら、企業や学校に属さない自由な創作活動を続けています。

過去の実績を一旦置き 自分のデザインを客観視

本業はプロダクトデザイナー。外資系エレクトロニクス機器メーカーでデザインランチオフィスのヘッドを務め、更に日本市場におけるブランディング形成など、経営に直結するデザイン戦略を立案する仕事に取り組んでいます。経営層やマーケティング、営業など他部門との連携も増大、社外との交渉も日常的になりました。話をするのは、技術部門にとどまりません。**デザインへの関心・認識が薄い相手にもそれが創出する価値を理解してもらうため、専門分野以外の人に伝える力が必要である**と考えるようになり、AIITに入学しました。

それまでの実績を一旦脇に置き、自分のプロダクトデザインに対する考え方やスキルを、利害関係のない場

で客観視しようと考えました。また、デザインを重要な経営資源と位置づけ、広い視野でプロジェクトを遂行させるために足りないピースを修得するねらいもありました。

仕事上で高めた 批判・反論への対応力

AIITで学んだ成果は、十二分にあったと自己評価します。なかでも、専門分野や世代が異なる学生による共同作業は、自分と異なる意見や視点を理解し対応することの訓練になりました。特にPBLでは、情報アーキテクチャ専攻の学生とのコラボチームを形成したため、前提や背景が全く違う学生でプロジェクトを遂行。そうした経験により、仕事上のレジリエンスを高め、**思いも寄らぬ批判や反論への対応力を身につけたことで、デザインの発信力を強めることができました。**

エレクトロニクス市場をはじめ、各業界でのグローバル競争は激化の一途を辿っています。AIITで身につけた力を存分に発揮し、これに勝ち抜くことが仕事上の使命。一方、AIITの仲間とのユニットでは、コトづくり・モノづくりの喜びを純粋に追求したいと考えています。

森 憲朗 さん

創造技術専攻 2013年修了
プロダクトデザイナー 事業プロデューサー
武蔵野美術大学卒業



プロフェッショナルの矜持を修得

在学中に方向転換し 専門性の修得を目指す

入学時は、製造業でITを担当。従業員 200人ほどの会社で、基盤構築からアプリケーション開発まで手がけました。開発や運用は学生時代から業務経験があったものの、もともとの専攻は数理統計学であるため、IT 基礎力の網羅性不足を自覚せざるを得ません。培った経験を体系化すべく、AIITに入学しました。

しかし入学後に通信事業者に転職したことで、目的意識が変わります。業界で市場価値を高めるためには、基礎だけでなく高度な専門性を獲得せねばなりません。そこで、自分の得意分野と市場動向を考慮し、選択肢をデータ解析と情報セキュリティとに絞りました。最終的には、PBL 説明会で**研究の公共性に触れた教授の言葉に感銘を受け**、後者の分野で専門性の修得を目指すことになりました。

情報セキュリティを選び 指導教授と共同論文

2年次のPBLでは、システムの企画・設計時からプライバシー保護を盛り込み、技術面や制度面での改善

を図るためのリスクアセスメント手法を開発しました。また、同手法を用いた顧客企業へのコンサルティングも実施しています。

これらの経験から、非技術的要素の重要性を肌で学びます。たとえば法律や経営組織論です。1年次に情報法の講義を受講していたことが奏功しました。また、**以前は見向きもしなかった経営学の書籍に目を通すようになった**のも、この頃からです。

PBLの成果は指導教員やメンバーと共同で学会にて発表し、論文にしています。

専門性に裏打ちされた 行動規範の体得

その後、勤務先にて**サイバーセキュリティ専門部署の立ち上げに参画し、現在はグループ全社を統括**する立場にあります。修了後にCISAやCISSPといった国際資格を取得しましたが、これらの基盤はAIITで培ったものです。

AIITとのつながりは現在も続いています。在学生のPBLのレビューをすることもあれば、必要に応じて科目履修生として聴講します。他企業の修了生と一緒に

に仕事をすることもありました。

情報セキュリティの仕事は、現実主義的に振る舞う一方で、常に原理原則を見失わないバランス感覚が重要です。また、相手の立場や力量に応じた適切なコミュニケーションも不可欠です。**在学中の最大の収穫は、このようなプロフェッショナルとしての行動規範を、PBLを通じて体得したこと**だと考えています。

近年は、セキュリティ事故が世上で取り上げられる機会が増えました。喧噪にあっても浮足立つことなく、お客さまを守るための各種施策を企画・推進していきます。

渡辺 慎太郎 さん

情報アーキテクチャ専攻 2013年修了
株式会社ジュビターテレコム所属
一橋大学卒業







CASE: 01

私の理想を体現する同期生に学ぶ

知って理解したことを 実践できるようにする学び

自分を変えなければ。—— そんな思いに突き動かされるようにして AIIT に入学したのは、20代の半ばを越した頃でした。

新卒で入社した会社での4年目、仕事を一通り覚えたつもりで参画した組織横断のプロジェクトチームにいて、他部署のメンバーと上手にコミュニケーションを取れない自分と直面します。

異分野の人との仕事がかどらな原因探しにビジネス本などを繰り返しますが、知り得たことと実際の行動との溝は一向に埋まりません。経験を通して学ばなければ身につかないと確信した私は、PBLをはじめグループワークを重視する AIIT の教育に自己改革の期待を寄せました。それまでの延長線上ではない変化を求め、会社を辞めて退路を断っての入学でした。

日常の業務に表れる 成長の証し

私には「一緒に仕事をしたいと思ってもらえる人」になりたいという憧れがありました。AIIT では、その見本といえる人に数多

く出会いました。同期生です。

グループ内の発言を活発にする雰囲気づくりに長けた方もいれば、プロジェクトの課題のありかを明確に示し、前向きな対応に周囲を巻き込める方もいます。同期生とはいえ社会でキャリアを積んだ方々ですが、そうした人生の先輩が当たり前のように取る行動に、私は憧れの具体像を見出します。そして、グループワークや PBL での協働を通して、みなさんが共通して持ち、私には欠けている能力や視点を明らかにしていきました。

例えばディスカッションの場で、他者が発言した言葉の意図を汲み取ろうとする姿勢であったり、自分の発言の裏づけや根拠を明確に示すことであったり。

分かっていても実行できないことを自然に行う同期生からも多くを学べることは、入学後に知った AIIT の魅力でした。

もちろん、先生方から教わったことも数えあげたら切りがありません。

現在の職場で発揮する企画構築やビジュアル構成のデザイン力、対外交渉での対応力、チームをマネジメントするコミュニケーション能力、そして仕事にまつわる倫理観などは、どれも授業で身につけたことです。

いまのわたしは、前提として仕事は必ず他者と関わると考え、職務に就いています。結果を示すだけでなくプロセスを明らかにして周囲と共有すること、主観にとらわれず相手の求めと自分ができる点を冷静にすり合わせることなどが、自然にできるようになりました。AIIT での2年を経て、入学前は考えもしなかった視点で大切に仕事を進める自分を見て、憧れの自分に少しずつ近づけていることを実感しています。

工藤 菜実さん

創造技術専攻 2016年修了
サンライトヒューマン TDMC 株式会社所属
桜美林大学出身





CASE: 02

プロジェクトマネジメントの手法を 地域振興に活かす

プロジェクトマネジメントの 実践的学習の場

家業の不動産賃貸業で問われるのは、経験に基づく目利きの力と専門的な法令の知識。仕事で会うのは不動産を専門とする人が大半です。そのため私は社会への視野を狭めないようITやビジネスについて広く学ぶことを心がけ、社会人向けのセミナーも受講していました。PMP（プロジェクトマネジメント・プロフェッショナル）も入学前に取得しています。

資格取得後、プロジェクトマネジメントへの関心は一層高まり、専門の大学院でしっかり学ぼうと考えました。AIITを選んだのも、PBLに魅力を感じたから。IT企業でプロジェクト管理の豊富な経験を持つ教授と共に、実践的に学ぶことを期待しました。

セミナー会社での講義と重複する内容も多いだろうと思っていましたが、授業を受けた実感は別もの。資格とは実務でいかに活かせるかにより価値が問われることを実感するとともに、私にとってはその実践的学習の機会となりました。

大規模プロジェクトを 成功に導くための研究

PBLは、前・後期で異なるテーマに取り組みました。前期はSCMを構築す

るITプロジェクトの教育教材で学習。各フェーズでメンバーが交替でプロジェクトマネージャーとなりプロジェクトを進めます。仕事では接することのない異世代・異業種とのチーム運営自体、私には新鮮な経験となりました。

後期は新メンバーを加え、IT以外の分野でのプロジェクト手法を研究。東京マラソンを立ち上げた方へのインタビューなどから、さまざまな業界に共通する大規模プロジェクトを成功に導く手法について考察し、研究成果発表を行いました。

多様な分野に応用できる プロジェクト管理の手法

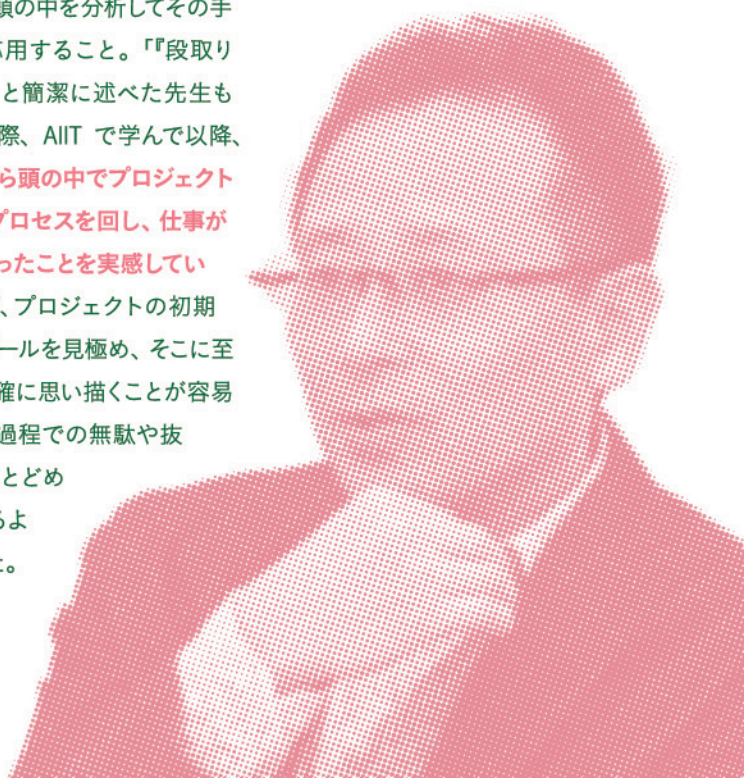
私の考えるプロジェクトマネジメントのポイントは、優秀なプロジェクトマネージャーの頭の中を分析してその手法を自分に応用すること。「『段取り力』がつく」と簡潔に述べた先生もいました。実際、AIITで学んで以降、**現場にしながら頭の中でプロジェクトマネジメントプロセスを回し、仕事が速く確実に became ことを実感しています。**例えば、プロジェクトの初期計画段階でゴールを見極め、そこに至る道のりを明確に思い描くことが容易になり、その過程での無駄や抜けを最小限にとどめることもできるようになりました。

ちなみに私の場合その実践は、会社がある西新宿の地域振興。特に秋恒例の祭礼では**プロジェクトマネジメントの手法を活用し、音楽イベントで大きな集客を実現**しています。さらに最近は、縁あって屋久島の地域活性化活動にも携わるようになり、現在は地ビールの開発と災害対応を想定したミニFM局の開局を目指し、新会社立ち上げに向けて活動しています。

AIITで身につけたプロジェクトマネジメントの能力は多様な分野で応用できることを、私自身が実証しているのではないのでしょうか。

河野 光伸 さん

情報アーキテクチャ専攻 2009年修了
株式会社河野ビル 株式会社河野洋酒店
株式会社 handson 代表取締役
成蹊大学卒業





「音楽体験」をデザインしたい

プロ仕様の製品には デザインは不要か

大学の卒業研究は、楽譜の自動作成技術について。放課後は音楽サークルで活動し、就職も音響機器メーカーへ。エンジニアとして音楽に関わるという夢は、大学卒業時にひとまず実現できました。

職場での担当は、プロ仕様のマイクロホンの設計。高度で繊細なスペックを追求しつつ、形状設計には常に迷いと悩みが付きまといました。次第に頭をもたげてきたのは、プロ用の機材にデザインは不要なのかという疑問。デザイナーになりたいわけではなく、設計にデザインの要素を取り入れ、ものづくりを広い視野で捉えたいからです。

学びの場として AIIT を選んだのは、ものづくり全般におけるデザインの位置づけや価値が学べそうだったこと。そして、実務経験のある先生や社会人学生から、他社のものづくりを知ることができると思ったからです。

感性と機能の 相互作用を理解

AIIT で学び、デザインの概念が広がりました。また、マイクロホンの設計と

は製品をつくって完結するものではなく、音楽という無形の作品を多くの人に届け、さらにそれを聴いた人の感動や喜びも含めた「音楽体験」の一端を担っているという意識が養われたことも大きな成果です。それまで混沌としていた感性の要素とスペックで表される機能との相互作用にも理解が行き届くようになりました。感性という不定型な要素を統計的に数値化できる手法を知ったことも、エンジニアの私を安心させてくれました。

マーケティングに生かす ものづくりへの意識

ところが、課程を修了し新たな気持ちで設計に臨めると思った矢先、製品設計からマーケティングを担当する企画部門への異動が決まります。

しかし、AIIT で学んだことが生かせないと思ったのは最初のうちだけ。むしろユーザーと自社製品をつなぐ位置に立ったことで、

「音楽体験」をデザインするという仕事観に実態が伴いました。音楽と同様に無形の対象を扱うサービス工学で学んだ知見も、いまの仕事なら活かせます。かつて私も否定できずにいた、ハイスペックな製品の価値は分かる人だけが分かればいい、という意識はもうありません。デザイン技法を学んだおかげで、言葉や数字で伝わりにくいことはその場で絵にすることもできます。スペックだけを追求していた設計に比べ、気を配らなければいけないことは多様で複雑になりましたが、何が大切かを図る判断規準が明確になった私の視界は良好です。

松井 徳子 さん

創造技術専攻 2014年修了
音響機器メーカー所属
法政大学出身





経験を体系化し、新たな可能性を開く

断片的な専門知識の すき間を埋め体系化を目指す

AIITを知ったのは、勤務していたパッケージソフトウェアの会社がIBM傘下となり、日本IBMに所属するようになった頃。それまでにパッケージソフトウェアの開発から運用・保守まで一通り経験していましたが、教育学部出身の私はITを基礎から積み上げるように学んでおらず、仕事で求められるスキルをその都度身につけてきました。

しかし、理系の修士号を持つ研究開発職に囲まれ仕事をするなかで、**ITに関する断片的な知識を結びつけ、自分の中で体系化する必要性を感じ始めました。**先輩のやり方や経験を頼りにしたプロジェクトマネジメントの手法や未経験だったJAVAなどを学べることも知り、AIITで学び直そうと入学を決めました。

職場の実務と教室の学びが リアルタイムにリンク

AIITの授業は、仕事にそのまま活かせる内容を多く含んでいました。また、経験的に身につけたことのITにおける位置づけや価値などを、論理立てて理解できるようになりました。奇しくも仕事で取り組んでいたデータベース

については**職場で最先端を研究しながら、教室では基礎を学び、それらが日々リンクするという社会人学生ならではの経験をしました。**これは、AIITの授業が常に実践を想定しているからだと思います。

職業経験を持つ社会人が実践的理論を学び成長する面白さを知った私は、情報アーキテクチャ専攻修了後、創造技術専攻に再入学します。

創造技術専攻ではMOTをはじめとする経営系の授業を通して、経営的視点や問題解決思考を獲得。デザイン系の授業では、訴求力の高いプレゼンテーション資料の作成法などを学びました。

2専攻で異分野・異世代の学生と共に学び、私の世界観や知識体系、いまに続く人脈は大きく広がりました。

IT分野を俯瞰できる 多視点を身につける

現在の私は、IT分野での人材育成や能力開発に関わる仕事に従事しています。在学時に果たした転職はAIITで築いた人脈によるもの。AIITで身につけた知識や手法を礎に、育成プログラムの企画・提案では経営者の思考を理解し、技術系スタッフともコミュニケーションしています。また自社の採用活動では、AIITでのグループワークやPBLで若い世代と交流した経験が活かされています。

そして現在は、人材育成に関わる分野での博士号取得を目指し学んでいます。AIITを経て私は、**学び続けることが自分自身も思いも寄らない可能性の開花につながる**ことを実感しています。

三好 きよみ さん

情報アーキテクチャ専攻 2008年修了
創造技術専攻 2012年修了
株式会社東証システムサービス所属
筑波大学 ビジネス科学研究科 企業科学専攻
博士後期課程在学中
愛知教育大学卒業



努力したい者が集まり、努力できる場所がある

積み重ねた実務経験を 社会に役立てたい

学部生の頃から、**ウェブデザイン**の分野で実務家教員になりたいという夢を抱いていました。ウェブデザイナーとして10年以上の実務経験を重ねたあたりから、AIITで修士号を取得し大学教員の公募に応募しようと考えてようになりました。2011年の震災を機に、自分の技能を社会貢献のために役立てたいと思い立ったことも、私の背中を押しました。

デザインの価値を評価する 多くの視点を得る

私が持つウェブデザインの技術は、仕事を通して実践的に身につけたものです。そのため、1年次の講義でデザインとは何かを学術的に考える多くの視点を得ることができたのは新鮮な経験でした。

例えば、人によって感じ方が違う匂いを定量化する手法や、説明が一切なくてもユーザーが適切に操作できるようデザインを洗練させるプロセスなどを学んだことで、自分の技能を客観的に評価する基準を持つことができました。

AIITの授業はグループワークが多

いのですが、年間を通して固定のメンバーでプロジェクトを完結させる2年次のPBLの密度は別格です。

私は、学部を卒業したばかりの20代の学生や留学生と組んだチームで、「飼育者の負担を軽減するペット用のバイオ型自動トイレの開発」に取り組みました。議論を重ねアイデアを出し合い、役割を分担して構想を具体化していきます。計画通りに進まないこともしばしばですが、メンバーの総力でリカバリーし、社会的に評価される成果物をつくり上げることがPBLの醍醐味です。そうした経験を通し、**グループでプロジェクトを進めていくうえで重要な考え方や姿勢を学びました。**

AIITでの学び方を 若い学生に伝える

AIIT修了後、私は北海道大学の科学技術コミュニケーション教育研究部門(CoSTEP)に着任しました。ウェブデザインの実務家教員として、ウェブを活用した科学技術コミュニケーションの可能性を追求しています。

指導では、学生自らが考え手を動かし、社会に受け入れられる成果物をつくり上げる力が修得できるよう心がけています。**それは私がAIITで**

受けた教育そのものであり、教室での佇まいまでAIITの教員を模範としています。

研究者としては、長年実務に関わったウェブデザインの変遷を系統樹で表現する研究を進めています。研究は始まったばかりですが、今年度の日本デザイン学会においてグッドプレゼンテーション賞を受賞することができました。本研究においても、**専門分野を社会に発信するための考え方やクオリティを測る基準など、AIITで学んだことが活かされています。**そして現在は実務家教員としての仕事と並行し、博士課程の学生としてデザインの学問的探究に取り組んでいます。

村井 貴さん

創造技術専攻 2015年修了
国立大学法人北海道大学
高等教育推進機構 オープンエデュケーションセンター
科学技術コミュニケーション教育研究部門 (CoSTEP) 所属



STARTUP

起業





CASE: 01

在学中に起業を実現

将来の起業を想定し 技術を学び直すために入学

テクノロジーを核とした会社の起業を念頭に置き、AIITに入学しました。

私は新卒で機械メーカーでエンジニアとしてキャリアをスタートしました。その後、総合商社で海外営業職として約8年のキャリアを積みました。さまざまな思いから技術系のベンチャー立ち上げをしようとするに至るのですが、その時点で私は技術者として長いブランクがありました。そのため、テクノロジーの最先端をキャッチアップし、技術者としての感覚を取り戻す必要がありました。働きながらその目的を果たせる条件をそろえていたのが、AIITです。

そして在学中に、株式会社テクニコルを立ち上げることができました。私の想定を大幅に早めた夢の実現といえます。

授業での議論の中で ビジネスの骨格を構築

テクニコルは、メンタルヘルスに関わるデータ分析を主な事業としています。ウェアラブルデバイスにより収集した膨大な

生体データを統計解析することでストレスの負荷や集中力の高まりをモデル化します。これをコア技術とし、利用者のメンタルヘルスを可視化するサービスの提供に取り組んでいます。

このビジネスの源は、AIITでのPBLの中で構築されました。入学時の想定よりも早い起業を実現できたのも、PBLで取り組んだ研究テーマが、現代社会の問題解決に直結していたからです。PBLで同じような問題意識を持った研究仲間と出会えたことは、とても良かったと思います。

さらに必要なテクノロジーを先生方から丁寧な指導により基礎から学べたことが、起業するうえで大いに活きました。

起業後も継続する 教授と仲間のつながり

PBLを終え9月に修了しましたが、AIITの先生方や仲間とのつながりは続いており、相談にのっていただくこともあります。同タイミングで起業したPBLの研究仲間とは、共同して実際のビジネスを進めています。

AIITでの出会いはとても貴重な財産となっています。

中川 達生 さん

創造技術専攻 2016年修了
株式会社テクニコル 代表取締役
神戸大学卒業





CASE: 02

ビジネスの種、AIIT で芽吹く

計画実行が加速し 在学中に起業

AIIT への入学は、将来の起業を想定してのこと。 会社を立ち上げるに当たっては、既存でない魅力的なサービスの創出が欠かせません。私はそれまで蓄積した人材開発や組織改革のノウハウをさらに発展させる、新たな知見と独自のスキルをここで得ようと考えました。AIIT での2年間は会社を興す準備期間。事業の具体化は修了までにじっくり考えるという計画だったのです。しかし入学の1年半後、私はにわかになんて会社を興します。思いも寄らぬスピード起業となりました。

振り返ればその予兆を、入学して間もなく感じていたようにも思えます。**社会人学生としての心構えさえおぼつかないガイダンス直後から、授業は新鮮な驚きと仕事に直結するヒントに満ちていました。** 密度の濃い授業は、モチベーションの高い同期生が教壇に向ける強いまなざしと相まって教室に知的な緊張感をもたらします。その雰囲気、起業に向けた私の意欲を研ぎ澄ませていきました。

授業を通して 新サービスを構築

敏感になった私のアンテナは、授業から起業後の事業につながるアイデ

アを感知します。例えば、統計解析やビッグデータ解析などに関わる品質工学や信頼性工学の授業からは、能力開発での課題を明らかにする評価・分析手法の開発や、人間中心設計をはじめとするモノづくり、コトづくりのデザイン手法を人材教育のトレーニングに応用することなどを思いつきました。ほかにも、**いま展開するサービスの基本をひらめいたのは AIIT の教室でのことでした。**

こうした学びを重ね、私は起業する会社が提供するサービスの特徴を整理していきました。また、実践的でありながらアカデミックな根拠を重視する講義は、経験上の感覚を確かなエビデンスで裏づけていき、起業の方向性を確信する自信を支えてくれました。

学びと成果創出を 実現する PBL

現在、当社が人材開発ソリューションとして提供する教育プログラムも、2年次で取り組んだ PBL のプロジェクトをもとに構築したものです。

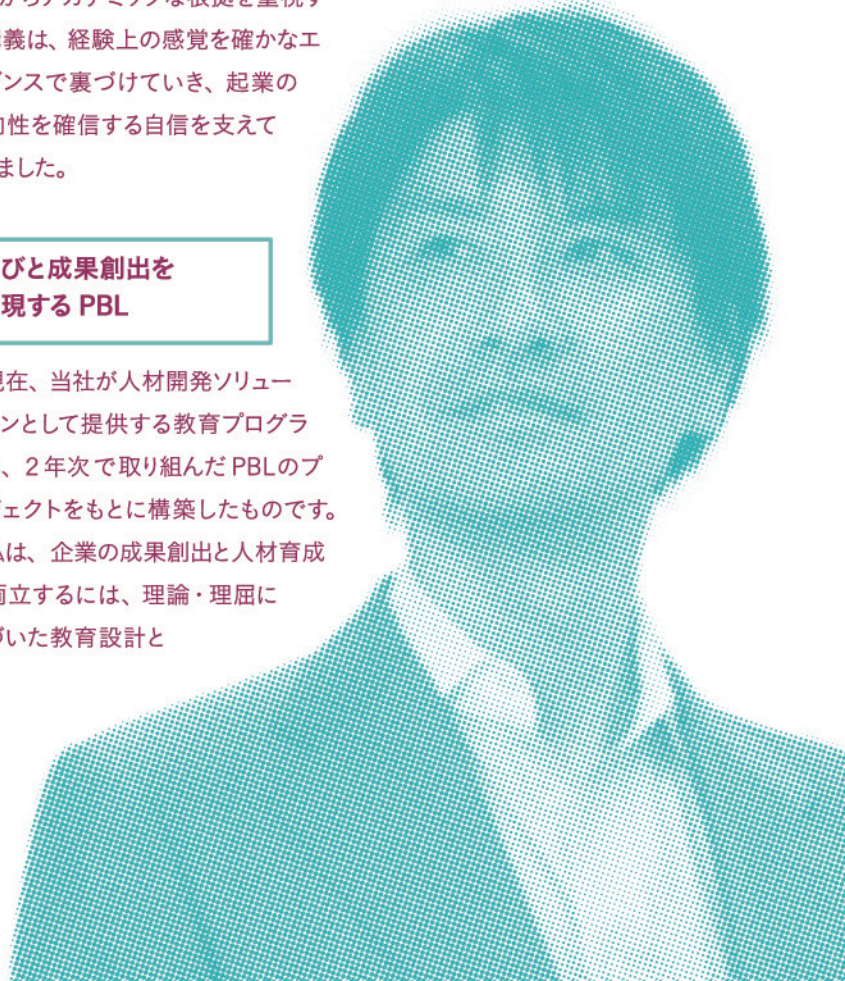
私は、企業の成果創出と人材育成を両立するには、理論・理屈に基づいた教育設計と

アクションラーニングが効果的だと思っています。PBL は、それを改めて実感する場となりました。これを私自身が成果と共に経験したことで、PBL から生まれた自社の教育プログラムを、自信を持って提供できます。

教授陣、同期生、学ぶ環境と、AIIT で巡り会えたことのどれ一つ欠けても、現在の私はあり得ないと考えています。

堀 貴史 さん

創造技術専攻 2016 年修了
リープ株式会社 代表取締役
明治大学出身





CASE: 03

開発者として生きる

蓄積された断片的な知識を整理したい

入学時は、海外製オープンソースソフトウェアのコンサルティングをしていました。顧客の要望に応じてシステムを設計し、ソフトウェアをカスタマイズ。これを導入しサポートするまでを担当していました。

業務の中で多様な技術に触れていました。しかし、断片的な知識が蓄積されている実感があり、一度それらを整理したいと考えていました。その頃にAIITの存在を知り、入学することに決めました。

PBL のものづくりを経て転職を決意

入学時の目標は、1年次の講義でおおよそ達成できました。その後臨んだ2年次のPBLが、その後の私のキャリアを大きく変えることとなります。

PBLでは「少人数での迅速な開発」をテーマに、1つのウェブサービスと2つのiPhoneアプリを開発しました。そうした中、チームでのゼロからのものづくりを修了後の業務にしたいと考えるようになりました。そして、修了と前後して転職することにしました。

転職先を選んだのは、オムニチャネルをテーマとして掲げていた企業。

そこでの業務は、PBL そのものといっても過言ではないものでした。各メンバーが個々の特長を活かし、役割に応じシステム開発に貢献しました。当然意見が分かれることもあります。PBL のように少人数のチームでの開発を実践することができました。チームでのものづくりは、一人では到達し得ないレベルの結果に至る可能性を秘めています。その醍醐味を教えてくださいました。

教授の仲介を得て立ち上げた会社

理想的な環境を得たともいえるのですが、その3年後に私は知人と会社を立ち上げました。それは、修了

後も交流が続いた教授の仲介によるものです。

設立から間もないため、現在は私を含め2名です。まだチーム体制どころではありません。一日も早く会社を軌道に乗せることが現在の目標です。将来、プロジェクトを共に遂行できる仲間が集まったときも、私は一人の開発者でありたいと考えています。

吉岡 明日葉 さん

情報アーキテクチャ専攻 2013年修了
ITサービス関連企業所属
ウェブサービス開発業務に従事
大阪市立大学出身





〒140-0011 東京都品川区東大井1-10-40
TEL: 03-3472-7831 (代表)
03-3472-7834 (入試等に関するお問い合わせ)
FAX: 03-3472-2790
E-mail: info@aiit.ac.jp
<https://aiit.ac.jp>